南北１６０km「心をつなぎ　気概に満ちた」十島の教育

十島村教育委員会だより　令和7年8月号

さわやかトカラ情報

〒892-0822
鹿児島市泉町13番13号
TEL099-227-9771

発行
十島村教育委員会

【リフレッシュと共に，研修と修養で教師力を高めて，さあ2学期をスタート!】

十島村教育委員会教育長　木戸 浩

今年は7月18日が終業式でしたが，地震の影響で，悪石島と小宝島では，住民の皆さんの避難と共に，留学生は約2週間ほど前に地元に帰り，リモートによるオンライン授業等を行いながら夏休みを迎えました。

「夏休み」と言っても，児童・生徒にとっては休みですが，先生方にとっては毎日が休みではありません。年休や夏季休暇を取って，リフレッシュを図っています。基本的には「勤務」が通常です。その中で，夏季休業中に教師としての資質向上のために，自己研鑽を図り，『研修と修養』に努めることになっています。

そのような中で，今年も先生方は給食調理員さん方の協力を得て，7月28日と29日の2日間，鹿児島市で実施しました「第50回十島村教育研究大会」に出席することができました。この大会は，十島村の先生方が一堂に会し，様々な分科会に分かれて話し合ったり，たくさんの講師の先生方から複式指導の方法や後期課程の専門教科指導法などを詳しく丁寧に指導していただいたりしました。合計13人の外部講師にもお越しいただき，非常に意義ある研修会になりました。十島村の全教職員が直接会って情報交換する機会もこの時だけです。また，2日目の全体講演では，子どもたちの自殺予防のためのSOSの出し方の講演を聴く研修会でした。今年は全国でも有名な『高橋聡美』先生に講演をお願いしました。非常に御多用な中に，御自身の東日本大震災の経験も交えながら，十島村の地震の被災者である児童・生徒と先生方に非常に示唆に富む内容でした。このように，夏休みの間にリフレッシュをした上で「研修と修養」に努めながら，また1歩力量を高めて，2学期からの授業に臨んでいきます。子どもたちと一緒に頑張る先生方も温かく見守っていただければ幸いです。

◎　先人の教育論・教師論に学ぶ

※　『教育論』　　～柳沢政太郎（やなぎさわ　まさたろう）～

1865-1972年，近代日本の文部官僚，教育者です。長野県松本市生まれで，大正自由主義教育運動の中で中心的な役割を果たしました。大正6年，科学的進歩主義の実験学校として成城小学校（成城学園・大学の起源）を設立。当校は，後にドルトンプランを採用して，その教育方法の中核となりました。ドルトンプランとは伝統的な一斉授業や受動的学習を排し，児童生徒が自己の能力に応じた学習内容を自力で学習するということに主眼を置いた教育方法でした。このような児童中心の新教育は，私立学校から始まり，やがて，官公立学校にも波及していきました。これも今の時代，今の自分に照らして読んでみてください。　「～個別最適で深い学びと協働的な学びの一体化～」

生きた人間を直接に相手にする仕事には，心身ともに健やかで正常な常識をもつということが何よりも大切である。教師の仕事は生き生きと成長する人間を直接相手にするものである。だから，常識を欠いては，とてもその務めを尽くすことはできない。

教育に関する世間の非難は，多くの場合，教師にこの常識が乏しいところから起こっている。例えば，規則（原則・原理，…個人の理念など）にこだわり，融通が利かないという非難，形式（個の尊厳が埋没するような全体主義）にばかりとらわれるという非難，実際に役に立たないことを行っているという非難などは，知識や道徳心の欠如から生まれてくるのではなく，多くの場合，常識（ここで言う常識は，ある社会に属する人間にのみ限定されるものではなく，あらゆる社会に属する人間に共通している人類的な常識を指す）が欠けているところから起こるのである。

※　2学期は，6つの学園（島）で，島民と一緒の運動会が実施されます。今年の夏は異常気象のせいもあり，かなり高温が続いています。練習を含め，「熱中症」対策を怠らず，安全に実施できることを願っています。

十　島　村　で　学　ぶ

子供のうた（五月十九日　南日本新聞掲載）

夜だけのお母さん

諏訪之瀬島学園六年　長谷川 カエラ

昨日の夜
お父さんは牛のお産
お母さんはお仕事
だから帰ってくるまで
夜だけのお母さん
寮生の夜ご飯の片付け
私と妹の夜ご飯づくり
こんなお仕事を毎日やっている
お父さんお母さんに
改めて感謝します

子供のうた（六月二十日　南日本新聞掲載）

スケッチ大会

小宝島学園 三年　中村　ひなた

わたしは牛が描きたくて
牧じょうに行った
牛は黒くて大きくてマッチョで
さいしょはとてもこわかった
でも描いていても動かない
くりっとした目と
くるくるするしっぽを見ていたら
かわいいと思ってきた
牛さん
かわいく描くからね

子供のうた（五月二十六日　南日本新聞掲載）

なんどもなんども

中之島学園 四年　吉野　将太

ぼくはつりがすきだ
たせけどときどき
つれないこともある
だけどなんどもなんども
はりをとおして
ようやくつれた
国語辞典ぐらいのオヤビッチャ
手を挙げてよろこんだ
だからあきらめないよ
なんどもなんども

令和７年５月１９日　南日本新聞「若い目特集」

【遠足は魚つり】

小宝島学園　４年　小谷兼之佑

今日は待ちに待った1日遠足。ぼくたちは港て魚つりをしました。

先生たちがえさをくまと，どんどん魚が集まってきました。

透き通った海では，形や色がきれいな魚や「ゆくぶつからないな」と思うぐらい泳ぎかたがおもいろし魚のむれがいました。

魚つりをはじめて10分ぐらいしたとき，つりざおに手ごたえがあったので急いでリールをまきました。

大きな魚だと思いました。引っ張ったら海の底の岩に引っかかっているだけでした。

先生が糸を切って直してくれました。

周りを見ると，友達がどんどんつっていきます。

となりの7年生も大きな魚をつっていました。くやしかったです。

魚は1ぴきもつれなかったけど，みんなで食べた豚汁がおいしかったです。

とても楽しい1日遠足でした。

第50回十島村教育研究大会

村内全ての先生が集い，十島の教育について学び合いました。今年で50年目となる伝統ある研究大会です。

【高橋氏の講演】

令和7年度海外ホームステイ報告会

本年度の海外派遣留学生（4名）の報告会が議場にて行われ，オーストラリアでの活動報告を行いました。

【宝島学園からのメッセージ】

宝島学園　教諭　山下　政幸

この文章を読まれている方もご存じのことと思いますが，今年の夏は，「終戦から80年目」という節目の夏です。そこで，戦時中の宝島の状況について，一部紹介します。

戦時中の宝島の状況

（2024年12月、島民の方から伺った話より）

◇　イマキラ岳の上に海軍が兵舎を造っていた。最新鋭の電波探知機があった。島では，軍隊の人から情報を得ることもあった。

◇　今のコミュニティセンターの前に電話を設置している小さな建物があった。そこに島の若い人が交代で入っていた。山の上の軍が飛行機や船を見つけると，「警戒をしなさい」という通知が電話であった。そのおかげで助かったということもあったと思う。

◇　学校の下にいるとき，はるか上空に飛ぶ飛行機を見つけた。「戦争が始まったら，日本の飛行機もあんな高い所を飛ぶんだな」と思ったが，それは敵機で、山の上の兵舎を空襲した。

島民の方は，話の最後に，

私たちは非常に大変な戦争を経験した。だから，（自分たちの世代の中で）「戦争をやりましょうよ」と思っている人はいないと思う。これからは，みなさんも一緒になって，「戦争は絶対にやってはいけない」という信念で人生を送っていただきたい。

ということをおっしゃっていました。月並みな表現になってしまいますが、今回，この文章を書いてみて，「まずは，私たち一人一人が戦争について学び続けることが大切だ」ということを改めて感じました。

この文章が戦争について考える機会になったという方が少しでもいらっしゃったら幸いです。